



日本記者クラブ

記者会見

羽生結弦 フィギュアスケート選手 平昌五輪金メダリスト

2018年2月27日



平昌（ピョンチャン）冬季五輪のフィギュアスケート男子で優勝し、フィギュア男子で66年ぶりの五輪連覇を果たしたばかりの羽生結弦選手（23）が、当クラブの会見に臨んだ。羽生選手は、昨年11月に負った右足首のけがを乗り越えて偉業を達成した。

この会見に出席した産経新聞特別記者の別府育郎さんは、日本記者クラブ会報（2018年3月号）の記事で、「いい会見だった。約8年、企画委員として主にスポーツ関係の記者クラブの会見に関わったが、これほど完璧な登壇者は見たことがない。玉石混淆の質問の全てを拾い、堂々、当意即妙の受け答えで宝石のごとくに光らせた。満場の記者、OBらは羽生の一言一言に一斉に顔を上下に動かし、うなずいていた。スタンドの観客を自らの世界に引き込む氷上の演技、そのままである」と称賛した。

司会：島田敏男 日本記者クラブ企画委員（NHK）

[YouTube 日本記者クラブチャンネル動画](#)

©公益社団法人 日本記者クラブ

司会＝島田敏男 日本記者クラブ企画委員 (NHK) 皆さん、お待たせいたしました。羽生結弦さんがこちらの会場にお越しになりました。

ご存じのように、先ほど外国特派員協会のほうでも会見なさっていましたけれども、きょうは、あちらの前の会場では質問の数が少なかったようですが、きょうは皆さんにできるだけ、お一人1問という感じで羽生さんにお尋ねしていただければと思います。

いまお話ししましたら、冒頭発言というものは特になくて構いませんということでしたので、私のほうから2～3問だけ、最初に伺わせていただきます。

申しおくれました、きょうの司会進行は、企画委員のNHKの島田です。総理大臣とか政党党首が来るときしか私にお呼びがかからないんですけども、きょうは光栄です、羽生さんの会見に私にオファーが来ました。よろしくお願ひいたします。

羽生結弦選手 こちらこそ、ありがとうございます。

司会 それでは、早速伺いしていきたくと思います。

月並みな質問からまず始めます。66年ぶりの二連覇、これを達成して帰国して、いまの時点での正直なご感想を一言、いかがですか。

羽生 一言で言うと、幸せです。

ただ、これはフィギュアスケートの歴史上において66年ぶりということで、いまからその66年前を振り返ってみると、全く違ったスポーツだったなとも思っています。写真でみることしかできないですし、古い映像もなかなか入手することができないので、あまりみられることはないんですけども、自分自身こうやってスケートを18年間やっていて、自分自身もみていて、全く違った競技になっているなと思いますし、特にこの4年間、僕自身、やっぴながら違う競技をしているような気になるほど進化が目まぐるしかったので、そういった意味では、すごく重いものになったなとも思っています。

また、日本人選手団としても、冬季オリンピックで二連覇ということがまず珍しいことだと思うので、そういうこと自体で、もちろん自分自身が持っている金メダルへの価値というものもものすごく大きいんですけども、世間の方が思っている価値というものもものすごく大きなものになっていて、そういった意味で、自分の首から下げているものはとても重く感じています。

司会 この金メダルを獲得した直後の記者会見で、羽生さん、こうおっしゃっているんですね。「いろんなことをとことん考えて分析して、それを感覚とマッチさせることが自分の一番の強みです」。こうおっしゃった。これは最近の大相撲に欠けている心技体の一致、合一ということにほかならないと思うんですが、こういう境地に達したのはいつごろ、どんなきっかけがあったのか、どうでしょう。

羽生 もともと僕はすごく考えることが好きで——考えることというよりもしゃべることが好きなほうが強いんですかね——自分が考えて、何か疑問に思ったことについて追求し、そして教えてもらって、さらにしゃべりながらまた自分が動いていく、そういったことが、もともと性格上ありました。

なので、考えていることを口に出す、いわゆる考えていることを表現する、それは、先ほどおっしゃっていた心技体に近いものがありますし、またそれがスケートに生かされているのも、またごく自然と自分の性格上なっていたのかなと自分では思っています。

司会 ソチのオリンピックで金メダルを獲得したときに、自己分析力は備わっていたんですか。

羽生 備わっていたというか、やっていたというほうが近いです。もともと疑問に思ったことというのを突き詰めてはいましたけれども、集中に対してであったり、プレッシャーに対してであったり、そういったことに突き詰めて考える時間が、僕の場合はそんなに多くなかったです。最初からプレッシャーは好きだったし、メンタルが強いわけではないんですけども、

緊張した舞台、または追い込まれた舞台で力を出すということが、いままでスケートをやってきて多かったように感じています。

司会 今回、当NHK杯でおけがをなされて、NHKの人間として私も胸を痛めたんですけども……。

羽生 NHKも出られなかったので済みません。

司会 そのおけがからの回復の間、これまでのご発言を聞いていると、論文を読んだり、あるいは過去のいろいろな映像をみたりして、要するに頭の中で次の勝利へのステップを組み立てていた、こういうふうに私には聞こえたんですけども、それは一言で言うと、どのような歩みだったのでしょうか。

羽生 いまできる全力、いまできるいまの僕自身を貫かなくてはいけないということが一番でしたね。

人生、こうやってまだ23年の自分が言うのも何ですけども、やっぱりできるときとできないときというのはすごくあるんだなというふうに、いままでスケートをやっていて感じるので、そのできるときにできることを精いっぱいやる、できないときはそれなりのできることをやる、それがすごく大事だなと感じたこの3カ月でもありました。

司会 私からもう一つだけ伺いたいです。羽生さんがスケートを始める前、いまから20年ぐらい前、私も仙台の町に勤務しておりました。あの町がスケーター羽生結弦を育てたと思うんですけども、もうじき3月11日です。仙台ばかりでなくて、被災地の皆さんに、今回の勝利の報告、いつごろになりそうですか。

羽生 明確にいつとは言いきれませんが、ただ、間違いなく仙台でたくさん応援して下さったことはみえていますし、メッセージも届いていますし、そして被災地の方々も、少しでも勇気や、また笑顔になるきっかけがあったらいいなと思っていたので、今回、情報の技術だとかメディアの技術だとか、そういうものが上がっていて、こうやって幸いにも僕はこれだけ注目されながら演技をすることができているので、

皆さんにたくさんの思いが届いているのではないかなと思っています。そのお力をもうちょっといただいて、また復興の力にもしていただけたらいいなというふうにも感じています。

司会 ありがとうございます。

では、会場の皆さんからいろんなご質問があると思います。大勢の方がいらっしゃるなので、原則お一人1問にしてください。

質問 金メダル、おめでとうございます。国民に感動をありがとうございます。

羽生 ありがとうございます。

質問 私がお聞きしたいのは、心の問題です。メダルを取った方、取れなかった方も含め、今回、日本選手がインタビューで周りの方々への感謝をいままで以上に口にされています。その一方で、世界では「勝てばいいんだ」とか「周囲への気配りではなく自分の競技に集中することが大切だ」という流れもあります。トップアスリートが世界を極めるためには、感謝とか思いやりというのは、どれぐらい大事なことだと思っていच्छやいますか。

羽生 まず、少しだけ情報の整理をさせてください。

もともと日本人が持っていたスポーツへの概念、トレーニングの概念というものは、いわゆる根性論だとか、そういうふうになたかたかあるかもしれませんが、メンタルを鍛えることでは、絶対にすぐれていたとは思っています。そして、日本人はその負けん気というものを武器にした選手、僕のような選手がいれば、絶対に勝ち負けは関係ない、自分が納得できるものを、という選手もいます。

逆に言えば、欧米でもそうですね、マイケル・ジョーダン選手などが特に自分は印象に残っているんですけども、誰に対してもリスペクトをする、そのリスペクトの心が自分を強くする、そういうふうにおっしゃっていたのがすごく印象に残っています。

もちろん勝ち負けだけを重視する選手もいるかもしれませんが、それはやっぱりその人の性格によると思っています。心の問題、集中力の問題、そういうことから言えば、僕は、先ほ



ども言ったように、性格上、すごく追い込まれると強いということで、あまり楽しい気持ちとか、またはリスペクトをしながら、感謝をしながら、ニコニコしながら演技をするというのは向いていないんじゃないかなと思っています。

そういった意味では、ちょっと変なのかもしれないし、特殊なのかもしれないですけども、絶対に勝ってやると思ったときのほうが力が発揮できたり、ということもあります。もう、それは選手の性格次第なので、ある意味、これから僕がもし指導者になって、または伝道師とか、いろいろなことを伝える立場になったときに、経験として伝えられることのひとつではないかなと思います。

そして、日本人の感謝の気持ちということは、日本人が絶対持たなければいけないものだと思いますし、僕自身もすごく大切にしています。それは競技以外でも、そして競技が終わった後、例えば柔道などもそうですけれども、絶対に自分が競技をしていたフィールドに対して挨拶をする、そして終わった後にコーチ、家族、そして周りに、幸いにもフィギュアスケートはすごく観客の皆さんが応援して下さることを実感できるスポーツなので、そういった方々にも感謝の気持ちを届けなくてはな、というふうに日本人の誇りとして思っています。

質問 競技以外の質問をトップアスリートにすることははばかれるのですが、今回はご容赦ください。

羽生選手が楽しいという気持ちで演技をするようなタイプではないという話がいまありましたが、羽生さん自身が、スケート以外で何か楽しさを感じる瞬間、もしくは楽しいと思うときというのは、どんなこと、どんなときなんでしょうか。

羽生 僕にとって楽しいは、そうですね、もちろんゲームも大好きですし、アニメをみることや漫画を読むこと。漫画を読むことのほうが多いですかね。そういったリラックスをするタイムは、やっぱり楽しいなとは思っています。

もちろん自分の趣味として一番有名なのは、多分イヤホン収集だったり音楽鑑賞だと思うんですけども、それもまたたくさんの方々に支えていただいて、本当に普通の人だったら聴けないんだろうなというような細部の細かい音まで出るイヤホン、ヘッドホンをたくさんたくさんいただいているので、そういうときはやっぱり楽しいですね。その楽しい気持ちが競技につながっていることは間違いないです。その楽しさがあるから頑張れているのかなという気がします。

ありがとうございます。提供して下さる方、本当にありがとうございます。この場をかりて御礼申し上げます。

質問 連覇、おめでとうございます。

羽生 ありがとうございます。

質問 私も現地で、リンクの近くで拝見して、大変感動しました。あのとき、ちょっと疑問に思ったことが一つと、もう一つ質問させていただきます。

ネイサン・チェンがもしショートプログラムで失敗しないで、羽生さんと同じか、あるいはそれよりちょっと上ぐらいの点数が出ていたら、フリーの構成は、もしかすると違っていたのかなというのが一つ。

もう一つは、フィギュアスケートについて、先ほど外国特派員クラブの中で、技術に基づいてこそその芸術であるという話をされていましたが、今後フィギュアスケートはどのような方向に進んでいってほしいのか、あるいは進んでいくべきなのか、5回転までいってしまうと何かジャンピング選手権みたいになってしまうんじゃないかという気がします。基本的には、プログラムでの勝負の方向に行ってほしいなどは個人的には思っているんですが、その辺のご意見をお願いいたします。

司会 合わせわざで1問ということで。

羽生 はい、頑張ります。

まず「時論公論」、ありがとうございました。みていました。

最初の質問、さらっといきますね。ネイサン・チェン選手が、ミスするとかしないとか関係なく、自分ができることをやろうと思っていました。それは、もうそのときになってみないとわからないですし、ネイサン・チェン選手がもし、「たれば」は僕は好きじゃないですが、「たれば」で僕より上になっていた場合は、もしかしたら自分のリミットをさらに超えたものをやれたかもしれません。それはわかりません。

これからのフィギュアの未来について話します。もちろん5回転が主流になったりとか、4回転半が今のトリプルアクセルのように主流になるということは、まずこの50年間においてはなだろうと僕は予測します。それが主流になってしまったら、おっしゃっていたように、ジャンプ選手権——それこそ僕は今回、平野歩夢選手とずうっとお話をさせていただいて、参考にさせていただいた部分があったんですけども——ハーフパイプみたいになってしまう。それはちょっと思います。

ただ、もし羽生結弦が4回転半もしくは5回転に挑む、試合で絶対に入れると決めた場合は、それは確実に表現の一部にします。それは言えます。その選手が、それぞれの選手が、そういうふうに見えるかどうかはわかりませんが、僕のスタイルはそこです。何より僕がフィギュアスケートをやっている理由は、そういうところにほれ込んだからであって、そういう演技にほれ込んできたから、こうやってオリンピックで、この種目で金メダルを目指したいと思ったわけであって、だから、難易度と芸術のバランスというのは本当はないんじゃないかな、芸術は絶対的な技術力に基づいたものである、と僕は思っています。

質問 以前、羽生選手は、いろんな学んだことをスケートに生かせることが自分の強みとおっしゃっていました。もしいま、次のステージに向かうに当たって、誰かにこれを学んでみたいというのがあれば、教えてください。スポ

ーツ業界の方でもいいですし、ほかのジャンルの方でも結構です。

羽生 まず、今回、けがをした後に、自分の憧れであるエフゲニー・プルシェンコさんを初め皆が、信じているよといったような気持ちを持ちながらメッセージを下さいました、そのことにまず感謝したいなと思っています。

もちろん影響を受けた選手というのはたくさんいますし、僕は、壮大な話になってしまいますけれども、自分が生きていく中で一つとして影響を受けなかったものはないなと思っています。例えば、いま自分がこうやってしゃべっているときに考えていることだって、そういうふうなことを聞いたから、そういうふうな思考になっているのかもしれないし、僕は幸いにも10歳になるぎりぎりですか、それくらいからこうやってメディアの方にインタビューをしてもらって、自分の思考を整理させていただく時間とか、あとはインタビューをしてもらうことによって覚える言葉だったりとか、そういうものもあつたし、そうやって自分をつくってきたなと思うし、そうやって自分はつくられてきたんだなと思っているので、誰かを特筆して言うことはないかな。

ただ、いますごく思うのは、こうやっていま言葉を発しているのは自分です。この後、メディアの方々が、本当に何十万、何百万、もしかしたら何千万かもしれないし、億かもしれないし、そうやって一人の人間からいろんな情報が伝わっていく、それって、すごく自分がいろんな方から影響を受けているからこそ、すごく光栄なことだと思うし、もし僕なんかがかきかけで、ちょっとでも人生や考え方がいい方向に向いたら、とても幸せだなと思っています。

司会 関連して、ぜひ一つお聞きしておきたかったんですけども、今回、宇野昌磨君が羽生さんを追いかけて、あのフリーの最初のジャンプは、羽生さんを追い越そうとしてチャレンジして失敗したと本人もそういうふうにおっしゃっていたけれども、そういう後輩がすぐ後ろにいるということは、いまの立派な先達に学ぶということの逆で、羽生さんにとってどういう意味を持つんでしょう。

羽生 まず一つ言っておきたいのは、僕はあの時点でもう勝利を確信していたので、彼が4回転ループを本当にきれいに決めていたとしても、まず点差的に負けることはなかったなど、まず言っておきます。(笑) すごい突っ込まれていたし、ファンの方々もあまりよく思っていない方もいらっしゃるかもしれないので、まず前提として。

やっぱり後輩が強い、そんなにいっぱいいるわけでもないんですけども、フィギュアスケーターは、ただ、自分を追い抜かそうとは本音では思っていないかもしれないんですけども、近づきたいと思ってくれる存在、そして、それが自分の国の代表としている、それは非常に心強いことだなと。考えてみれば、まだ引退するとは言っていないし、引退する気持ちも全然ないですし、やるがありますけれども、ただ、引退しますと簡単に言ってしまうと、彼に任せられるというか、そういう頼もしさは感じています。

ただ、まだもうちょっと、そうですね、人前に出るときに寝るとか、そういうことは、もうちょっと学ばなければいけないのかな、もうちょっと面倒みなければいけないかなというふうには思っています。

司会 いや、先輩らしいお言葉。

これから先のことを考えますと、実は先ほど、この会場に入る前に、東京の中国大使館の方から羽生さんにかわいいパンダのペアのプレゼントをいただきまして、ぜひ北京でも頑張ってくださいという、とてもフレンドリーなメッセージがありました。

この次のオリンピックに向けてというと、どんなことをお考えになっていますか。

羽生 次のオリンピックに向けては、まだ未定という言葉が一番いまの頭の中ではあります。もちろん自分がやりたいことには、もちろん4回転アクセルだとか、もしかしたら5回転の練習もしたいと、4回転半が跳べたら思うかもしれないですし、それはまだわかりません。ただ、いま一生懸命やることを一生懸命やって、その延長線上に北京オリンピックがあるので

あれば、もし出るなら、絶対に勝ちたいと思っています。

質問 今度のオリンピックがもっと先の日程だったら、羽生選手はいまごろ足の療養していたと思います。長い将来を考えたら、1年ぐらい療養されて、足を徹底的に治したほうがいいんじゃないかと思うんですが、いかがですか。

羽生 間違いなく、おっしゃられたように、これがオリンピックでなければ、僕はすぐに痛みどめを飲んで、こうやってピークをつくることはなかったと思っています。何よりも治すことが大事だというのはすごく思っていますし、これからのスケート人生、何が起きるかわからないので、やっぱり休んでいたと思っています。

実は、フィギュアスケーターはオリンピックで金メダルを取った後、若い選手であっても1年間休養したり、もしくはオリンピック以外、要らないから、3年間しっかり休んで、また3年後に、そのシーズンにだけ合わせて体をつくってきたり、絞ってきたりする選手も実はいるスポーツです。

そういった中で、僕はソチオリンピックの後、金メダルを取ってもすぐに試合に出て、その後の試合で金メダルを取って、また来シーズンすぐに試合を始めました。

ただ、今回は、足の状態があるので、治療に専念するという気持ちは変わっていません。回りくどい言い方かもしれないけれども、言えることが限られているし、もしかしたら、自分のこれからのスケートがちょっといまわかっていない状態なので、詳しくは自分もわかっていないので言い切れないんですけども、間違いなく言えることは、いまの自分のこの金メダルを取ってきたという気持ちだとか、自分のスケートだとか、そういうものをすごく待ち望んでいる方がいらっしゃるということはいずれのことだし、またアイスショーにおいても、こういったイベントだったりとか、いろいろところでしゃべる機会があったとしても、こうやってたくさんの方が待ってくださって、自分の声やスケートを、お金を払ってでもみにきてくださる、そういった方々のために、ちょっとで

も自分のスケートを使えたら、ちょっとでも自分の体力とか気持ちとか気力とか、そういったものを使えたらな、というふうにはいま思っています。

質問 二連覇おめでとうございます。

羽生 ありがとうございます。

質問 そして、日本中を幸せな気持ちにしてくださいって、本当にありがとうございます。

羽生 ありがとうございます。

質問 世界中の名だたる選手が羽生選手のことを、「人間性を含めて尊敬している」というふうに発言されていますけれども、羽生選手が挑戦し続ける力ですとか、自分を律する力、そしてまた奮起させる力、その原動力というのは一番どの部分にあるんでしょうか。

羽生 まず、いま皆さんと話しているこういう時間というのは、すごく自分の中ではスイッチが入り切っていないくて、割とゆっくり話しているし、この人、フワフワしているなどと思われるかもしれないですけども、割と自分の中で、スケートが始まったときだとか、スケート靴を履いて氷に乗った瞬間だとか、スケートのことを考えてアップをしている時間とか、そういうときは本当に違う人間になっているんじゃないかというぐらい切りかえています。

それは自分の精神力だったりとか、絶対に勝つんだとか、絶対に強くなるんだという原動力だと思っていますし、その切りかえがうまくいかないときももちろんあるんですけども、その切りかえを絶対にやるというふうに決めています。

それが多分ここまで、特にオリンピック、不安要素がいろいろあったし、やれないこともいろいろあったんですけども、その中でやれたというのは、そういう自分の中の切りかえやめりはりがあったからかなと思います。

質問 連覇おめでとうございます。

羽生 ありがとうございます。

質問 小さいころからの夢だったとおっしゃっていたんですけども、私にも2人子どもがいますが、小さな頃は、ちょっと失敗してへ

こたれたりとか、ほかの誘惑があったりとかで、夢からそれてしまうようなこともあったかと思うんですけども、羽生選手がずうっと夢を継続されて、力をつかみ取った、その原動力はどのような力だと思いますか、それは。

羽生 うーん、何ですかね、自分の中での、いま自分が持っている夢というものって、割と形がしっかりしていて、それは多分、昔の自分なんですよ。昔、小さいころに、ああ、これやりたい、これで強くなりたい、これで一番上に立ちたい、こういう人になりたい、そういうふうに憧れていて、それを信じ切っていた自分が多分いまもずうっと心の中に残っていて、その自分の心の中で絶対やってやるんだと言っている昔の自分が多分僕の夢というか、夢の原動力になっているんだなとは思っています。

だから、もちろん誘惑とか、たくさんあるし、僕もすごい野球をやりたいんですけども、先生も厳しくて、毎日正座ばかりしていたし、スケートやっている時間のほうが多分短かったぐらい、先生に怒られてずうっと立っていました。でも、それでもスケートをやめなかったのは、やっぱりやれていることに特別だなという気持ちがあったからかなと思います。

フィギュアスケートって、陸上ではできないですし、もちろん小さいころから金銭面で大変だということは、自分は姉がいたので、そういうことも薄々気づきながらやっていました。だからこそ、こうやって続けられることが特別だなと思ったし、何より先生方もすごく特別視してくれて、すごく面倒みてくれて、こうやって育ててくださったので、そういうことに気づけたらからここまで来れたのかなというふうに思います。

ただ、夢がかなう人って本当に限られていて、はっきり言ってしまえばですけども、自分の夢だって、かなったのはこの金メダルだけといったらおかしいけど、この金メダルがかなった夢だけであって、ほかの夢はたくさん捨ててきたので。だから、夢っていっぱいあっていいと思うんです。で、絶対、適性があるし、高い目標じゃなくても、低い目標だって夢と言えると思うので。

これから、いろんな子どもたちが夢を持ちながらいろんなことをやっていって、少しでもその夢がかなう瞬間をつくってあげられるような、かなう瞬間になるきっかけのような言葉を出せたらなといま改めて思いました。

司会 小学生のころ、スケートのトレーニングを始めたが、それが厳しくて、途中で野球をやりたいと言ってご両親を困らせたというのは有名な話ですけども。

羽生 いや、全然両親は困っていなかったですね。

司会 そうですか。「やめるんならやめてもいいわよ」と。

羽生 「やめたいの？ じゃ、やめなさい」という感じで、もう全然困っていませんでした。「覚悟がないんだったらやるな」という感じがありました。

ただ、先ほども言ったように、あまりにも特殊なスポーツだし、何よりも先生たちが本当に力をかけて面倒をみてくれたので、自分の中でも絶対やり通さなければいけないという気持ちもあったし、何より、小さいながらもかもしれないんですけども、いまほどでもないかもしれないですが、例えば9歳ぐらいのときに、本当にやめたいと思ったことがあって、「もうやめる」と言って、「じゃ、やめなさい。野球でもやりなさい」となったときに、ふと思いつ出したのが、9歳だからまだスケートを始めて5年たっていないぐらいなんですけれども、「あっ、こんなところでこれを終わらせてしまっているのかな」と思ったんです。多分そのときに気づいたのが、僕、もうスケートに人生かけているなって思ったんですよ。

司会 9歳で。

羽生 (笑)だから、これをやめちゃったら、もしかしたらこれまでの生きていた意味がなくなっちゃうかもしれない、とまで思ってしまった、だから、そういう覚悟はずうとあったのかなと思っています。

司会 そうすると、羽生さんは、フィギュアスケート以外では夢をみたことがない。

羽生 あります。いっぱいあります。歌を歌

いたいとか、うまくなりたいとか、何だろう、いろんなことを想像して、こうなりたいとか、これをやっていけばよかったなとかとすごい思いますけれども、でも、全てスケート関連ですかね。スケートがやっぱり一番かけてきたものが多いです。

司会 時間があとわずかになってきました。

羽生 さらっと答えられるように頑張ります。

質問 前回、ソチの後、仙台市内でパレードして、9万2,000人の方がいらっしやいました。今回も仙台市のほうでパレードを検討しています。そのパレードへの期待、あと、こういったメッセージを伝えたいとかあれば、お願いします。

羽生 ぜひ仙台でお金を落としてください。やっぱりパレードするにはたくさんの費用がかかって、そしてどれだけ特別な支援があつてのことかということ是非常にわかっています。それを強くわかっているからこそ、ぜひ仙台に足しげくとは言わないですけども、仙台に通っていただいて、来ていただいて、ぜひ「杜の都」のよさ、そして、そこで何かを買っていただいたり、そこで何かをみていただくことによって、ちょっとでも仙台の復興に、宮城の復興に携われたらいいなと思っています。

司会 では、後ろの方。いま左手を挙げられた方。

質問 金メダルを取られたときに、けがをしていなかったら取れなかったんじゃないかということをおっしゃったと思うんですけども、それがどういうことなのか、もう少しかみ砕いて教えていただけますか。

羽生 実は、66年前に連覇をされたディック・バトンさんという方が僕にメッセージを送ってくださっていて、そのメッセージが、リラックスだったり、オリンピックの経験を楽しめというものだったんですけども、彼自身、練習をし過ぎていい演技ができなかったというふうに語っています。

もしかしたらですけども、僕がけがをしないで万全な状態でオリンピックに向かっ

たら、そういうふうになり得たのではないかなというふうにも思っています。オリンピックで絶対勝つ、こういう気持ちをすごくずっと持っていたからこそ、オリンピック直前にけがをしまして、調子が悪くなって最終的にボロボロになってしまったかもしれないなという気持ちを込めて、「けがをしなければなかったかもしれない」という言葉に乗せました。

質問 金メダル、本当におめでとうございました。

羽生 ありがとうございます。

質問 モチベーションの変化についてお伺いをします。

先ほどの夢のお話の中でもあったんですけども、オリンピックの後、4回転アクセルが唯一のモチベーションという発言があったかと思うんですが、そういった意味も含めて、ご自分の夢を突き詰めて目指していた自分になるというようなフェーズという部分は、今回の金メダルである程度達成されて、もしかして別の部分のフェーズにモチベーションというのが、例えば人を通じて喜びを得ていったりというような形のフェーズに移りつつあるのかなと、同世代の目線として感じるんですけども、そういった面から、モチベーションの移り変わりというのは、どのように感じていらっしゃいますでしょうか。

羽生 間違いなく今回思ったことは、自分が幸せになったときに、たくさんの方が幸せになって、そして、その幸せが還元されてまた自分に戻ってきて、自分がこうやって笑うことによってみんなが笑ってくれる、そんな平和な世界じゃないですけども、そういうことはすごく感じました。

ただ、それはいつから感じたかと言われたら、ちょっと明確じゃないのでわかりません。もちろんオリンピックの前から感じていたことは確かだと思います。それは多分、自分がけがをして、一緒に苦しんでくれたファンの方々や、自分の家族だったり、サポートメンバーがいたからだと思っていますし、これまでいろいろやってきて、4回転アクセルとか、いろいろ言っ

ていますけれども、フェーズというよりも、いつも徐々に、何といたらいいかわらないけれども、サナギが羽化してきて、ゆっくりゆっくり羽を伸ばしている段階、それがいまの自分かなと思っています。

司会 ということは、まだ羽は伸ばし切っていないという強い意志のあらわれですか。

羽生 そうですね。それがすごくゆっくりなんだなと思います。時には雨に打たれて、全然広げられないときがあったりとか、そういうものが僕の人生かなと、いま思っています。

質問 二連覇、おめでとうございます。

羽生 ありがとうございます。

質問 世界で一番となると孤独みたいなものもついてくるんじゃないかなと思うんですが、そういった孤独感のようなものをお感じになるようなことがあるのか。そして、もしおありになるんだしたら、どのように向き合っているのかをお伺いできますでしょうか。

羽生 これは「ある」と言ったほうがおもしろいんですかね。(笑)

なくはないです。あるというふうにはもう言えないけれども、前はすごい孤独だな、誰もわからないんだろうな、この気持ち、と思いながらやっていました。それはもちろんありました。特に、前回のオリンピックが終わって、それからいろんな人に祝福されればされるほど、ああ、自分の気持ちってどこにあるんだろう、そういうのはすごく思っていました。みんなが、周りがあまりにも幸せになり過ぎていて、僕の幸せは何なんだろうって、僕が頑張ってきたものって、本当に自分に還元されているのかなと思うこともありました。

でも、いまこうやってみんなに特別視されていて、やっぱり「ありがとう」とか「おめでとう」とか、そういう言葉って、気持ちがこもってなかったとしても、たとえ心の奥底では「このやろう」とか思っていたとしても、やっぱり素直に受けとめるとうれしくなったりするんですよね。それって、すごい幸せなものだと思うし、それが自分を通して世界に、本当に自分は特別だなと思うのは、こうやって日本

だけじゃなくて世界に発信できる、それは一人の人間としてだけじゃなくて、自分がこういう特別な存在になれたからこそ感じなくてはいけない使命かなというふうにも思っています。

司会 まさにそういうのを包容力というんでしょうけどね。ソチのときからの4年間、その包容力のような、要するに受けとめるということに関して、自分自身、成長したなという思いはありますか。

羽生 そうですね、あります。ただ、もちろん包容というんですか、受けとめる中で、やっぱり嫌な言葉を受けとめられたりとか、すごくネガティブな方向に受けとめたりとかということはいまたくさんありました。いまでもあります。もちろんいまのほうが多いのかもしれないけれども、でも、そういうのも含めて、やっぱり僕にはたくさんの味方がいて、たくさん信じてくださる方がいて、何よりも自信になっているのは、すごい実績のある方々が自分のことをすごい褒めていて、いままで自分が夢みていて、こういうふうになりたいと思っていた人が自分のことを認めて、「彼が本当のチャンピオンだ」とかと言ってくれるこの世界に対して、感謝の気持ちしかないですね。

質問 金メダル、おめでとうございます。

羽生 ありがとうございます。

質問 いま孤独との闘いというお話もありましたけれども、我々からすると、手に入れたものは全て手に入れられたのかなというふうにもみえます。プライベートでは、将来家族を持ちたいですか、パパになりたいみたいな、そういった思いとかもあったりされますか。

羽生 はあ、これは何て答えたらいいのかがわかりません。やっぱりここまで応援して下さるファンの方がいて、ファンじゃない方も今回すごく応援して下さっていて、何か家族を持ったら、それこそ「裏切られた」とか言われるかもしれないし、アイドルじゃないですけども。

でも、そうやって応援して下さる方がいるというのはすごくありがたいし、先ほど、普通の人からみたらですけども、僕からの目線じ

ゃなくて、普通の人からみたら、手に入れるものは全て入れたらろう、お金も名誉も地位も、でも、僕にとってはそんなことは全然なくて、実はこうやって地位とか名誉とか、お金ももちろんそうですけれども、結局飾られたものでしなくて、自分本来の気持ちとか夢とか、そういうものが全て満足感に満たされているかと言われたら、そんなことはないです。これからも一人の人間として普通に生きなければいけないし、たまに特別な存在として、こうやっていろんなところに立って、座ってしゃべって、滑って、そういうことを皆さんといろいろ共有しながら生きなければいけない時間も多分あると思います。

ただ、それはいましかできないことだし、いろんな幸せ、いろんな葛藤、そういうものを皆さんと分かち合える幸せというものを大事にしたいなといまは思っています。

司会 ということは、まだしばらくは普通の幸せ、家庭を持つといったことよりも、競技者としての幸せをさらに極める、こういうことでしょうか。

羽生 競技者としては言い切れないです。何になるか僕もわかっていないし、何ができるかということも、具体的に何となくは思い描いていますけれども、明確には何ができるかわからないですし、ただ、言えることは、やっぱりこうやって金メダルを取って、二連覇して帰ってきたということがたくさんの方の幸せになっていることは間違いのないし、それができるのは僕しかいなかったということだと思っています。

司会 それでは、最後の質問。どうぞ。

質問 競技とは全然関係ないんですけども、競技終了後、皆さんからプレゼントが相当投げ込まれたと思うんですが、その行方はどうなっているのか。

羽生 森に帰りました。

司会 プーさん、森に帰る？

羽生 すごくこの言葉が好きで、別にギャグとかではなくて、森に帰ったというのが一番ファンタジーでいいかなと思ったんですけども。

司会 いまの点、もしあれだったら、さらに重ねてどうぞ。

質問 きのうはマラソンで設楽選手が1億いただいたということがありまして、花束とか、プーちゃんとかがお金であったら相当よかったのになというふうに私は思ったんですけど、いかがでしょうか。

羽生 (笑) 正直、すごくリアルなことを言いますよ。だって、現地に来てくださっている方って、まずチケットを取るために相当なお金を使っているんじゃないかなと思いますし、フィギュアスケート観戦って、結構高いんですよ。だから、(テレビ番組で) ファンの方の特集とか、結構されたりして、みてもいるんですけども、本当に一部の方の声しか届いていない。それをすごくねじ曲げた特集をする局もあるんですけども、でも、すごく言えることは、ファンの方々が全て来ているわけではないので、(観戦に) みえていない方のサポートというか、みえていない方の応援もすごく大事にしたなというふうには思っています。

だって、高校生の方とか、大学生の方とか、そんな大金を払って韓国に来れないし、何より倍率がすごく高いので、取りたいとって予約しても取れなかった方もたくさんいると思うので、そういう方々にも感謝が届くような演技ができれば、幸せが届けられればというふうに思っています。

だから、プーさんを買ったお金とか、チケットを買ったお金とかが飛んでいるというふうに思っています。経済が回っているんだったら、それで十分です。(笑)

司会 とてもリアリズムに徹したお話をいただきました。

始まる前に、いつもの揮毫、これをご紹介します。「自分自身を貫く」、こうお書きになりました。さあ、その心は、羽生さん。

羽生 昔、自分がオリンピックに行く前、夏なんですけれども、今シーズンの夏なんですけど、



「いまを貫け」というふうに自分に言葉を出しました。それは、絶対にけがをしていないとは言えなかったし、けがじゃなくても、病気だとか、調子が悪かったとしても、今というのは揺るぎないものなので、それを貫いてほしいと思いました。

これは、羽生結弦のために書いたわけではなくて、羽生結弦がこれまでいろいろやってきた中で、ちょっとでも皆さんが夢をかなえるきっかけになるような言葉として書いたものです。自分を貫いていると、何かしら言われることはたくさんあると思いますし、もちろん家族に心配されたり、逆に家族に文句を言われたりとか、本当に信じている人に裏切られたりもするかもしれません。ただ、そうやって自分自身を貫くことによって後悔は絶対しないと思います。その後悔をしない生き方をしてほしいなと思って書きました。

司会 羽生さんから世界へ贈る言葉ということがわかりました。ありがとうございます。

それでは、恒例の記念品の贈呈ですけども、この色を羽生さんは選ばれました。ご自分で胸に当ててみていただけませんか。

羽生 地味だ。

司会 シックな大人の色調ですね。

羽生 そうですね。間に青とか白とか入っているんですけども、すごくスケートっぽくていいなと思って選ばせていただきました。

司会 ありがとうございます。では、これと同じものをお持ち帰りください。

羽生 ありがとうございます。

司会 どうもきょうはありがとうございます。(拍手)

文責・編集部